

平成27年度水稻生育診断予測事業速報No. 2

(早植栽培6月8日調査結果)

平成27年6月11日

栃木県農政部経営技術課

 **平年より莖数が多く、草丈も長い。早急に間断かん水に入る。**

 **イネ縞葉枯病の防除を徹底する。いもち病の発生に注意する。**

1 気象概況《5月下旬～6月8日（宇都宮）》

5月下旬～6月第1半旬までの平均気温は平年より1.8～3.7℃高く、日照時間は131～166%と高温・多照で経過した。降水量は5月下旬は平年比37%であったが、6月第1半旬はまとまった降雨があり平年比158%と多い状況であった。

梅雨入りは、昨年よりも3日遅く、平年と同じ6月8日であった。

2 調査結果《早植栽培、品種：コシヒカリ》

(1) 16か所平均（表1）

草丈は長く（平年比117%）、莖数は多く（115%）、葉齢は0.3葉多く、葉色は0.2淡い。葉齢から判断して、生育は2日程度進んでいると考えられる。生育診断値（葉色×莖数）は平年比110%と大きい。

(2) 分施体系の生育（10か所）（表1、図1～2）

ア 草丈は39.5cmで平年比117%と長く、莖数は449本/m²で平年比111%と多い。

イ 葉齢は8.3葉で平年より0.3葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年より2日程度進んでいる。なお、大田原市、真岡市、小山市では5～9日程度進んでいる。葉色は4.5でやや淡い。

ウ 生育診断値（葉色×莖数）は2,034で平年比104%とやや大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は5か所、イネドロオイムシは5か所で確認されている。発生程度は無防除地区で高い傾向にある。なお、イネヒメハモグリバエの発生は確認されていない。

(3) 全量基肥体系の生育（6か所）（表1、図1～2）

ア 草丈は38.7cmで平年比118%と長く、茎数は418本/m²で平年比127%と多い。

イ 葉齢は8.1で平年より0.3葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年より2日程度進んでいる。葉色は4.5で平年並である。

ウ 生育診断値（葉色×茎数）は1,869で平年比126%と大きい。

エ イネミズゾウムシの発生は1か所、イネドロオイムシは4か所で確認されている。那珂川町及び芳賀町でイネドロオイムシの発生程度が高い。イネハモグリバエの発生は確認されていない。

(4) 地温の推移【農試調査】（図3-1～3-2）

前回調査（5月26日）以降、気温は平年よりも高めに推移したことから、地温も平年より高く経過した。

3 技術対策

気象庁地球環境・海洋部発表（27年6月4日）の「関東甲信地方 1か月予報」（6月7日～7月6日の天候見通し）では“平年と同様に曇りや雨の日が多く、平均気温は高い”と予想されている。さらに、気象庁地球環境・海洋部発表（27年6月10日）の「エルニーニョ監視速報（No.273）」では“エルニーニョ現象が続いており、強まりつつある。今後、冬にかけてエルニーニョ現象が続く可能性が高い”と予想されている。一般的に、夏にエルニーニョ現象が発生すると、日本付近では太平洋高気圧の張り出しが弱くなり、梅雨明けが遅く、冷夏・多雨・日照不足になる傾向があるとされている。

天候不順に対応できるよう、以下の点に以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

前回の調査（5月25日）以降、県内全般に高温・多照傾向であったことから、葉色はやや淡いものの、草丈、茎数とも前号と同様に平年を上回り、生育診断値（葉色×茎数）は、分施、全量基肥とも平年を上回っている。

初期生育が旺盛で過繁茂になると籾数過剰になり、登熟低下、白未熟粒の発生、食味低下を招きやすい。特に、天候不順時は同化産物の生成・転流が滞り、登熟低下等が助長される可能性が高まる。さらに、分けつが多くて茎が細くなると、蓄積される同化産物の量が減少し、登熟期に穂へ転流する量が不足して登熟低下となる可能性も

ある。また、草丈が長いことから、節間伸長期の葉色が濃い場合は、下位節間が伸びて倒伏が多くなることも考えられる。

前号で平年より早め（6月第1半旬から）の間断かん水を推奨したが、まだ実施していない場合は早急に間断かん水を行う。

(2) 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。

天候不順時は稲体の窒素濃度が高くなりやすく、拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要がある。特に、分けつ盛期以降は加里濃度が低くなるので、出穂前40～45日頃に積極的に加里（成分で4～5 kg/10a）を追肥する。

(3) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（27年6月1日）の「植物防疫ニュース（速報No. 2）」及び6月3日付けで発令された「平成27年度 病害虫発生予察注意報第1号（イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ媒介）」によると、県中南部の保毒虫率が高まっております、4月下旬以降の高温によりヒメトビウンカ成虫数も多く齢期も進んでいることから、水田への飛び込み時期は早まると予想され、防除時期も例年より早める必要がある。当該地域では、イネ縞葉枯病ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用＋本田での薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

農業環境指導センター発表（27年5月22日）の「平成27年度 病害虫発生予報第2号」によると、葉いもちの発生予想は「少」であるが、BLASTAM (<http://www.jpnn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2015.htm>) による葉いもち感染好適条件判定結果では、6月に入って県北部で準感染好適条件が出現し始めている。天候不順時は、稲の軟弱生育といもち病の発病好適条件が重なり、発生が拡大して減収の危険性が高まる。間断かん水により稲体の窒素濃度を下げて稲体を硬くし、いもち病に対する抵抗性を高めるとともに、特に常発地域、箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）が効果的である。また、いもち病の発生源となり得る

取置き苗は早急に処分する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)

(4) 低温への備え（深水管理が可能な畦畔の準備）

稲が低温に弱い時期は、幼穂形成期（出穂前25日頃、早植コシヒカリで7月上旬）～減数分裂期（出穂前14～7日頃、早植コシヒカリで7月中～下旬）である。特に、減数分裂期に最低気温が17℃を下回ると不稔が発生し、減収の危険性が高まる。さらに、幼穂形成期、減数分裂期の両時期に低温に遭遇すると被害が助長される。

このような場合は、幼穂形成期から減数分裂期にかけて深水管理を行い、水の保温効果により幼穂を低温から保護することが基本技術である。そのためには、畦畔を深水管理が可能な状態にしておく必要がある。

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！

7月21日に、農薬危害防止研修会を開催します（13:30～とちぎ福祉プラザにて）
お申込み・お問い合わせは、栃木県農政部経営技術課 電話 028-623-2286

4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。

高齢農業者の事故が増加しています！以下のことを心がけましょう。



- ・こまめな休息や健康診断の受診等、疲労回復と健康管理を徹底する
- ・ヘルメットや安全靴等、事故に備えた服装をする
- ・複数人での作業を基本とし、やむを得ず一人の場合は携帯電話を持つ